

否定は抑制とは違う。後者においては、あなたは願望や経験の妥当性は認めるのだが、（通常は）現実的な理由からそれを表現することを拒み、本当はしたいと思っていることのせいではかにされずに切り抜けようとする。否定は、それが随伴している一見した強情さの故に、反動形成とは異なる。あなたは、何かを拒絶することを自分が選んでいる（あなたが本当に選択力を持っていうと、まいと）と感じるのだが、これに反して、反動形成においては、反対の極端へのあなたの移行は自動化しており、あなたの自然な反応のように思われ、葛藤は感知されない。反動形成についてのわれわれの議論の中で宗教的感情に対する防衛の一例として挙げた宗教への攻撃は、否定についても起こりうる。その場合、拒絶と攻撃の強さが意識的に体験されるであろう。

否定は、それが働いている最中に、特にあなたの強い拒絶反応を観察し、その底に隠れている何か他のものの香りを嗅ぎつけることによって見破ることができる。

麻痺化／注意散漫

麻痺化／注意散漫 *narcotization/distraction* とは、注意を能動的に断片化すること、エネルギーを分散させること、容認しがたいものから注意をそらすことである。実際のな目的のために（訓練の効果を無視して）、われわれは比較的一定した量の精神的注意しか利用できないようにしてしまうのである。シミュレーション・プロセスは、一度に実に多くのことを取り扱うことしかできなくなる。容認しがたい願望や感情は、それがわれわれに利用できる多くの注意力をとらえる時にのみ、本当に迷惑なものになるのである。もしその注意があることから次のことへとびよんびよん跳び移り続けられ、

それをとらえることは困難である。

仮にあなたがある人と談話中に、あなたが買ったばかりの高価な車種を「コンシューマー・レポート」がテストして、その車は作りがぞんざいで、故障しやすく、つまらない買物であることを見出したそうだ、とその人が言うでしょう。われわれのほとんどは愛車と相当に同一化しているので、それが大きな投資であるという現実によって影響されることはもちろん、自分の判断にこのように水をさされることは、狼狽させられる事柄である。が、あなたが自分の判断の否定的な意味合いに反応し始めると、それはあなたに明日車が修理に出されることになっていることを思い出させ、それがさらに明日の夜見に行く予定の映画を思い出させ、そしてそれからあなたは友だちの髪型がとても魅力的なことに気づき、それについてあなたは何かを言い、それがあなたに以前一緒に行ったピクニックのことを思い出させるので、今度は自分が空腹であることに気づく、などなど。麻痺化は、物事を鈍く感じるようにさせるために精神エネルギーそれ自体を取り去ることによってではなく、それをかなり動き回らせ、あなたを狼狽させるかもしれない出来事からあなたの注意をそらさせることによって、現実の脅威的な側面に対してあなたを鈍感にさせるのである。

ここでは、世界シミュレーターは怠惰ではない。むしろ、面白い世界を創り出すべく超過勤務しているのだが、しかしそのプロセスはあらゆるものに同等のエネルギーと注意を注ぎ、それによって何かもっとも重要なことを強調しないようにするのである。

麻痺化が支配的な偽りの人格スタイル（類型）である時、あなたはとても忙しい生活を送ることになるが、しかしその全ての活動にもかかわらず、どういうわけか、本当に重要なことはないがしろにされる。その忙しさの結果、さらに、あなたは多くの時間疲れた状態に陥るようになり、その疲れ

は、あなたの人生で何が見失われているかに気づくことができないほどあなたを鈍感にさせうる。麻痺化は、真の成長に対する主要な防衛になりうる。ある教師から別の教師の許に移ること、一度にくつかの異なった靈的修行を行なうこと——この全てはあなたをあまりにも多忙にさせ続け、あなたの本質的な自己の声を聞けなくさせてしまうのである。

度を越した忙しさを疑うこと、全ての活動によっておおい隠されている静かな感情を探し出すことによって、麻痺化による防衛が働いていることを暴くことができる。

退行

退行 regression は、一般に、より「成熟した」防衛機制が適切ではなかった時に使われる、土壇場の防衛とみなされている。人は、物事がおそらくはより満足のいくように運んでいた、そういう比較的早い年齢で持っていた人格および心理構造へと退行する。この退行は、被験者が自分はより若くなっていると主張し、あたかも本当にそうであるかのように非常に納得のいくように行動する、催眠的年齢退行の場合ほど明白ではないかもしれないが、しかし代りに、感情的態度における比較的早い年齢への移行を伴う。退行はほんの数瞬しか続かないかもしれないし、もっと長期間続くかもしれない。

数年前、私は、これらの退行を観察するのに役立つ技法を開発した。これは、答えについて系統立てて述べたり、考えたり（検閲したり）する時間を与えず、質問に対して即座に言葉で答えさせる「フラッシュ・アンサー」法というもので、もしあなたが真実を学び、語ることを確約した場合、非常に意味深い。友人やあなたの配偶者にこの確約をし、あなたが感情的になつている数瞬の間に、「あな

たは何歳ですか？」と不意に質問してもらう。質問されたら直ちに、たとえどのようになんたが答えを判断しようと、ふっと頭に浮かんだ最初の数字で答える。

答えは、普通、驚くほど若い。議論中の二人の人によってこれが行なわれると、自分たちが三ないし四歳の感情年齢から活動していることを当事者同士が認めたとたんに、いかに議論が笑いのうちに消えていくかは驚きである。これは、しかしながら、相互信頼と基本的尊敬の雰囲気の中で行なわれなければならない——相手が幼稚になつていて、それを認めるよう強いることによつて、自分のほうを議論に勝たせるためのやり方として用いてはならない。このフラッシュ・アンサー法は、あなた自身について学ぶために他の多くの仕方を用いることができる。

部分的で短時間の退行は、認識されているよりもはるかに一般的なのではないかと、私はうすうす感じてゐる。退行は、われわれの偽りの人格の恣意性を実証する。われわれのより若い頃の自己の全ての要素が利用できる——それらに「これは私だ！」という感覚を付加することによつて、われわれはより若い頃の自己を蘇らせるのである。

合意的トランスは厄介な状態である。われわれの本質、われわれの深い感情、願望、および才能のあまりにも多くの部分が、何が正常かについての合意へとわれわれを順応させべく条件づける過程で否認され、ねじ曲げられてしまったのである。かくして、合意的トランスは緊張に満ちている。防衛機制は、文化全体を適切（社会的な基準によつて）に機能させるための緊張緩和装置であり、パツファーなのである。

けれども、個々人がこうむる損害は非常に大きい。光は、消えてはいないまでも、非常にかすかで

ある。人生には、われわれを自分自身および他の人々から疎遠にさせる、緊張とあわただしさという特質がついてまわる。この自己疎外と相互に作用しつつ、また、それを大きく増幅させつつ、外的現実、とりわけ他の人々についてのわれわれの知覚の歪曲、および自動化と防衛機制の故に起こるわれわれ自身の感情についての知覚の歪曲とが、結果として不適応行動の頻発を招くようになる。

こうした行動の結末が、愚かな苦しみと私が呼んでいるものを大量に生み出す。この愚かな苦しみは全く不要であり、本当の問題を解決するのに使うことができるであろうエネルギーを散逸させてしまう。世界における苦しみは多くは、愚かな、不要な苦しみであり、トランス状態に陥っている人々によって生み出されたできそこないである。かなりの量の苦しみは避けがたく、正常な（あたりまえの）ことだという、われわれの文化における一般的な信念は、さらに高くつく防衛機制の役を果たし、われわれが自分自身および文化を疑うのを妨げる。二次的利得が、さらに、聡明と幸福へのわれわれの自然な願いを阻害する。愚かな苦しみは一般的かもしれないが、しかしそれは、健全であるという意味で「正常」ではないことは確かである。それはとんでもない浪費なのだ！

もしわれわれが目覚めることができたら、何をすることができなくなるだろうか？

【原注】

(1) *Tart, Transpersonal Psychologies* に収められた Lilly and Hart の論文参照。

(2) 多くの人にとって、故意にかつ意識的に嘘をつくことを時間を限って実践することは、非常に成長に役立つ。

- (3) それはまた非常に難しい。何度かにわたり、私は自分の「気づき増進訓練」グループの参加者たちに、二週間にわたり毎日五つの小さな罪のない嘘をつくようにするという、「単純な」宿題を与えたことがある。私は、嘘は無害であること、彼らにとつても、彼らに嘘をつかれる人々にとつても、いかなる現実的結末も持たないものとするよう定めた。けれども人々はこのエクササイズの実行にとつてもなく大きな困難と緊張を覚えたか、または絶えずそれを忘れようと努めることによつて抵抗された。
- Tart, *Transpersonal Psychologies* に収められた Lily and Han の論文参照。

第十四章 三脳存在における均衡と不均衡

これまでの数章で、われわれがトランスに陥り、われわれの知覚が歪められて知性が減らされ、そしてわれわれが不要な苦しみを生み出して、生きいきした生命エネルギーのあまりにも多くを失う、そういう多くの仕方を検証してみた。ここでは、知性の性質に影響を与える合意的トランスのさらなる特徴を見てみることにしたい。

グルジェフは、われわれは三脳存在（三つの脳を持った存在）であるという、一見したところでは奇妙に思われる考えを絶えず強調した。けれども、この考えは現代の発達心理学の発展において中核的である。

われわれが脳のことを思い浮かべるとき、われわれは、考え、現実をシミュレートすることをその機能（役目）とする、われわれの頭の中にあるあの身体器官のことを思い出す。考えることは論理的なプロセスであり、そしてわれわれは明らかに考える脳を一つ持っている。だとすれば、三脳存在などというものがありうるのだろうか？

確かに「脳」とは「考える」器官ないしプロセスを意味するが、しかし「考える」とは一般的にはどういう意味かを考えてみよう。思考は、普通、知覚とともに始まる。あなたは情報を取り込み、したがって、思いめぐらすべき何かを手にする。（すでに見てきたように、われわれは文化的に適切な仕方で知覚するよう文化適応させられてきたということをいったん考慮すると、知覚は単純な行為で

はなくなるが、さしあたりそれを単純なものとしておく。それから、思考はこれらの入力データを徹底的に調べ始める。あなたはその中のパターンを探し、それをあなたの記憶の中にある他の情報と比較し、それに論理を適用する。すなわちあなたは、現在の状況についてのシミュレーション、およびあなたが受け入れるさまざまな代案に基づいてありうる結果についてのシミュレーションを創り出し、そしてどの結果がもっとも望ましいかを検討する。シミュレーションのいくつかはイメージで表わされる。多くは、普通、言葉で表わされる。これは、最後になんらかの結論に到達して終わる。

われわれの間違ひは、思考についてのわれわれの概念を知的な種類のもの——特に言葉によるもの——に限定することにある。実際には、多種多様の思考およびシミュレーションがある。思考、*thinking* という言葉は、知的活動、特に言葉による活動という強い意味合いを持っているので、今後は、より一般的な用語として評価 *evaluation* という言葉を使うことにする。三脳存在としての人間というゲルジェフの概念は、そこで、三つの主要なタイプの評価があることを示す——われわれが通常思い描いているものとしての知的評価、感情的評価、身体/本能的評価という。¹

感情的評価ですって？ 本能的評価ですって？ 感情というのは、論理的、知的な思考よりずっと「原始的」な何か、しばしば論理的な思考の邪魔をする何かではないだろうか？ 本能というのはいっそう「原始的」なのではないだろうか？

進化論的な意味では、イエスである。われわれと比べて、下等動物はほとんど一または二脳存在であり、われわれが持っているものに匹敵できるほどの知的脳を持っていない。また、現実的な意味で、イエスである。事実、数多くの人々の感情的脳と身体/本能的脳は、知的脳と比べて原始的な状態にある。しかし、感情的評価も身体/本能的評価も、それぞれに特別の仕方、知的な思考と同様

の高いレベルへと発達させられ、教育させられることができる。事実、何人かの人々は高度に発達した感情的脳を持っているが、しかし、通常、彼らの知的脳と身体／本能的脳ははなはだ未発達である。何人かの人々は高度に発達した身体／本能的脳を持っているが、しかし、知的評価と感情的評価は発達が不十分である。三種類の評価の全てがバランスよく、発達していないことが、人間の苦しみの主要な原因なのである。

馬、馬車、御者のたとえ話

三脳存在としてのわれわれの性質と、その各々の未発達および不均衡の結果生じる問題を内容豊かに例証している、馬と馬車と御者についての東洋のたとえ話がある。馬と馬車と御者は、合わさって、潜在的な乗客——主人——を行きたい所まで連れてゆくための輸送・支持システムを構成する。馬車は主人を安全快適に運ぶ物質的な支えを、馬は原動力を、そして御者は主人の目的地までシステム全体を案内するための実際的な知識を提供する。馬と馬車と御者は、主人が現われ、どこかに行きたいと望む時はいつでも、出発する用意ができていなければならない。けれども、一般的には、このシステムはうまく機能しない。

御者は、しばしば、馬車を車庫に入れておくべき時に雨や雪の中に置きっぱなしにするので、多くの部品が錆びたり腐食したりしている。整備は不十分で、部品は交換が必要で、安全走行に対する危険がある。ほどよく使われてこなかったことが、さらなる劣化をもたらしてきた。たとえば、馬車には、路上で馬車が揺れると、それに応じて注油動作を始めさせる仕組みになっている自動注油システム

が内蔵されているのだが、しかし長期間じつと動かないままだったので、多数の継手が凍結し、腐食している。外観はきたならしく、人目を引かなくなっている。安全で効率的な運転にとって重要な、バランスの良い、良く整備された馬車からなら得られるであろう、あの道路への「感触」は、そのお粗末な状態によって歪められているのである。

馬は、馬屋の中にいるべき時に、熱い太陽や雨や雪のさなかに外に置かれていて、馬車につけられたまま多くの時間を費やす。御者は馬の食事に十分な注意を払っていないので、その餌は質が悪く、馬は栄養欠乏性疾患で苦しんでいる。時々馬は長期間無視され、全然餌を与えられず、飢えることがある。また、あまりにも濃厚すぎる餌をもらう時もある。時には愛情をこめて手入れされ、世話される。またある時は、なんのはっきりした理由もなしに御者に虐待され、鞭で打たれたりする。その結果、馬はきまぐれで神経質になり、馬車を強く乱暴に引っ張りすぎる時もある。なかなか動こうとしない時もあるれば、御者の命令に従う時もあるれば、御者に噛みつこうとする時もある。

御者は、主人が命じる目的地に馬と馬車を案内すべく用意を整え、主人が現われたら運転席にすぐ飛び乗れるよう近くにいななければならない上、馬と馬車の整備にも責任がある。けれども、一般的には、御者はふらりと洒場に行き、仲間の御者たちと一緒に飲んだくれる。彼らはある時は底抜け騒ぎをしているかと思うと、次の瞬間には喧嘩を始めたか、感傷的になったり、自分がした素嗜らしい（が、たいていは想像上の）旅についての、あるいは自分が仕えるであろう、または仕えていると想像することを好む、有力な主人についての大げさな話やほら話を披露しあう。実際の体験と空想があまり区別されていないのだ。

このいつ果てるとも知れないどんちゃん騒ぎの最中では、馬車の所に戻って、馬をつけ、目的地に

向かつてくれという主人の呼び出しも、御者の耳には、普通、入らない。主人の呼び出しが聞き取られる場合でも、御者の酩酊状態は、主人を安全かつ迅速に目的地に運ぶというよりはむしろ、馬車を立往生させたり、道に迷ったり、衝突させたりしてしまう見込みのほうが大きい。

主人が馬と馬車と御者を使おうとさえ滅多にしないことは不思議であろうか？ あるいは、御者が、幾分しらふになつた瞬間に、自分の人生におけるある種の大切な使命が果たされていないと感じることは不思議であろうか？ 馬が恨みにあふれ、怒りと絶望を交互に発作的に繰り返すことは不思議であろうか？

右の事態には、しばしば部分的な例外がある。時には御者はかなりしらふで聡明であるが、しかし、服従しようとする彼の意志にもかかわらず、主人は彼の神経質で半ば飢えている馬と故障した馬車と一緒に、あまり遠くまで行けない。時には十分餌を与えられた、強靱で、従順な、見事な馬が馬車につながれているが、しょっちゅうかかる馬車の欠陥ブレーキと、酔っぱらつた御者とは、旅はわくわくさせるかもしれないが、どこにもたどり着かない。時には馬車は外観が立派で乗り心地がよく、入念に整備されているが、しかし酔っぱらつた御者と半ば飢えた馬とは、どこにもたどり着かない豪華な乗物にすぎない。

馬車とはわれわれの身体のことである。馬とはわれわれの感情のことである。御者とはわれわれの知的な心のことである。主人とは、もしわれわれが高次の性質を発達させたらなることができるであろう、そういう存在のことである。

身体

現代では、身体は、しばしば、ひどくおろそかにされている。現在の文化では、われわれのほとんどは食べ物にはふんだんにありつけるが、しかし自分の身体の不可欠な欲求に耳を傾けるよりはむしろ、バランスの悪いダイエットを取ったり、流行の食欲抑制薬によって痩せようとしたりすることが多い。病気になるで一時的に注意を喚起されるまでは、自分の身体が基本的に健全かどうかによりはむしろ、その外観やそれが流行に遅れをとっていないかどうかのほうにずっと多くの注意が払われる。身体／本能的脳による適切な評価が、病気のかかり始めに対してわれわれの覚醒を促すべきなのである。

われわれの身体は、動いたり肉体的な仕事をしたりするよう目論まれた。巧みな肉体的努力はそれ自体が報いになるだけでなく、また、馬車の自動注油システムを作動させる。が、現在の文化では、ほとんどの人にとつての「成功」の頂点とは、一日中机に向かつて坐り、なんの肉体労働もしないことである。われわれの文化では、肉体労働者は、普通、最低の地位しか与えられない。当今のジョギングやその他のフィットネス・スポーツの流行は多少の進歩である。それが続くことを望もう。

抑鬱は、今日ではごくあたりまえになっている。もし中年の座業従事者がサイコセラピストの許を訪ねて抑鬱を訴えれば、心理療法を施される代りに、彼は直ちにフィットネス・プログラムに付されるべきだという、興味深い主張がなされる可能性がある。結局、患者はもつとも基本的な点で身体をおろそかにしているのである。で、医学的な知識に照らせば、患者は結果的に病気になる、身体をおろそかにしない場合より、おそらく数年早く死ぬ確率が高い。彼は抑鬱に陥るべきなのだ！ 彼の気

分について語っても、身体を運動させることにはならないであろう！もし身体が良好な状態になった後もお依然として不調を訴えるなら、その時は心理療法を受けてみるだけの価値があるかもしれない。

普通は非常に専門化したやり方ではあるが、身体／本能的知性を発達させてきた人々がいる。運動選手たちのことである。勝つために、強靱さ、筋肉運動の協調、身体／本能的知性のいくつかの選り抜かれた側面が、高いレベルへと押し上げられてきたのである。熟練した選手は強いだけではなく、業が巧みである。選手は、より良く演技することを覚えるために、自分の身体が語りかけていること——身体／本能的脳のメッセージ——を感知する。こうした専門化した発達は、人生の他の領域をおろそかにするという点で、しばしば高価な代償を強いられる。

時として、この専門化した運動家的能力の発達が、肉体の言い分全般を「感じ取り」、それを人生の多くの領域で充分にかつ聡明に用いることへの全体的な関心へと伸びていくことがある。また、一般的な感受性と発達のために意図的に鍛える訓練もある。大極拳や合気道のような、「内面」技として知られている東洋の武術はこの好例であり、粗暴な力よりはむしろ、身体で知的に感じ取ること、および知的な動きの流れを強調する。

また、身体／本能的脳を発達させていくと、やがて特別な意志力——勝とうとする強い感情的願望や粗暴な頑固さの押しにではなく、確固不動さ、業の巧みさ、意図の明晰さにかかっている、そういう意志力——が発達することもある。身体／本能的脳が未発達な者にとつては、合気道のような内面的武術における離れ業は、しばしば、奇跡的に思われる。

身体／本能の発達は、専門化した運動能力の訓練を別にすれば、われわれの文化では単におろそか

にされるだけではない。それは、しばしばひどく歪められるのである。身体についての恥の感覚が、しばしば幼少年期に植え付けられるのだ。「なんて下劣な子なんでしょう！ 恥を知りなさい！ 自分が何をしたのか、よく見てごらん！」これは、精神分析的研究所の見解が示唆するところでは、もし両親が幼児の自然な身体機能を拒絶すれば、人生の最初の段階で始まる可能性がある。肉体とその機能は本来罪深いものであるという、いくつかのキリスト教的観念におけるように、はっきりした文化的な教えがこうした身体の拒絶を強化するかもしれない。肉体／本能的機能の一般的な無視や拒絶は成人期まで存続する可能性あり、そのためわれわれはこの種の評価をより高いレベルへと発達させずに来ただけではなく、また、それがすでに提供してくれている情報を拒絶してしまう。

私の経験では、身体／本能的脳は現実を評価し、その結論の多くを体内感覚および感じフイリシヤの形で表現する。もしあなたの身体が拒絶されているが故にあなたがそれに注意を払わなければ、あるいはもし全ての身体感覚を罪深いものと自動的に誤解すれば、身体／本能的脳からのメッセージを受け取ることはできないのである。

感情

われわれの感情的脳は、活力、動機づけ、われわれを動かす力、および生きることの喜びを与える。それは四六時中出来事を評価する。これは好きだ、それは嫌いだ。これは気に入った、それはむかつかせる。これはやってみる価値がある、それはうんざりさせる、あるいは面白くない。これは私を心配にさせる、それは私を助けたい気にさせる。

学校に行くと、われわれは、理知的知性を発達させることを目論まれた無数の科目、および身体／本能的知性の専門化した側面を発達させるための若干の体育コースをさえ履修することを要求される。が、感情的脳の教育はほぼ完全に欠落している。われわれの何人かは、幸運にも、例外的な感情的天分（インテリゲンツ）と感受性を持って生まれ、あるいは人生に強いられて感情的感受性を発達させ、洗練させた。けれども、われわれのほとんどにとって、感情的脳は、たいてい、なんの訓練もされていない愚か者のレベルに留まっている。

もちろん、もしあなたが、苦しみのあまり感情を偽り隠す人々に取り囲まれていたら、感情的感受性それ自体はありがたいものではないかもしれない。こうした状況があまりにも一般的なので、われわれの多くは、圧倒されないように、自分が持っていた自然な感情的感受性を抑制すべく熱心に努めたのである。その時はそれでよかったのだが、今となっては、それはわれわれの人生をだめにするのだ。けれども、文化適応と防衛機制に関する教章で見たように、われわれの感情的機能はあまりにもひどく歪められうるので、われわれは、普通、単に感情的な愚者としてだけではなく、神経症的な感情的愚者として終わる。われわれは、ただ単に感情的感受性について学ぶだけではなく、自分がそれから知覚するであろう、他の人々の、そして自分自身の避けがたい否定的な感情の扱い方を学ぶ必要があるのだ。

われわれのたとえ話に照らせば、われわれが愛やその他の感情的注意を必要とした時、われわれはしばしばその欠乏で苦しめられ、他の時には、はっきりした理由もなくたつぷりそれを与えられた、ということである。愛が惜しみなく与えられていると告げられている間さえ、愛を得るためにわれわれはしばしば自分自身を変え、自分の本質（エッセンス）を否定しなければならなかったのだ。われわれの感情、

われわれの自然な感情的知性は、両親やその他の権威者たちによってしばしば否認されたのだ——「おまえは本当はそんなふうに感じていないんだ！」 何度も何度も、われわれは、自分が本当に感じたことの否認と一緒に、何を感じるべきか言い聞かされたのである。

われわれに与えられた感情および感情的関心の質が、しばしば、とても劣悪だったので、われわれは、身体的な栄養欠乏性疾患と類似した、感情欠乏性疾患を発現させてしまったのである。半ば飢えた、病気の、気まぐれに扱われた馬のように、われわれは感情を切望し、かつ、それらを怖れる。時には強い感情で我を忘れることがあるかと思えば、他の時には行動する動機づけを得られないこともある。われわれは愛や関心や親切を求め、かつ、それを怖れる。時には、われわれは飼い主の手を噛む（恩を仇で返す）。確かにわれわれは、馬車と御者——われわれの身体と知的な心——に、あてにならない、しばしばぞつとさせるような人生の旅をたどらせるのである。

われわれのかくも多くが感情に深い不信の念を抱くとしても、なんの不思議もないのではあるまいか？

知性

われわれのたとえ話では御者が飲んだくれていたが、これは、知的脳の発達過剰とアンバランスな支配の結果生ずる、さまざまな観念で夢中になった状態の的確な描写である。操作的思考についての第五章で論じたように、われわれは、「もし……したら、どうなるだろう？」を思い描き、シミュレートし、論理的に予測し、そして想像することができ、で、それはわれわれのもっとも優れた能力

の一つである。しかしながら、そのような推定とシミュレーションは、感情的および身体／本能的脳の評価によって調整されないと、知的脳は、それ自身のシミュレーションや空想で調子に乗りすぎてしまう。賢明なシミュレーションはそれ自体が、あるいはそれだけで報いであり、一つ巧妙な考えが浮かぶと、それが次の考えにつながるので、われわれは実際はそれらに斟酌してしまふのだ。

操作的思考には、何が許され、何が許されないかについての、ある種の論理、一組の規則の行使が要求される。けれども、われわれの社会における知的機能に関わる一大問題は、単一の「論理」しか使われないことである——唯一の、正しい、論理的な考え方しかないという、われわれの暗黙の信念である。現在、哲学的には多くの論理体系があり、その各々が恣意的であることをわれわれは理解している。

一つの論理体系は、いくつかの仮定をすることによって創り上げられる。一つの論理を創り上げるのに、あなたは望みのどんなことを仮定することもできる。われわれが皆おなじみの論理、幾何学、を使うために、平行線は、どんなに遠くまで延長しても同じ距離を保つという考えを考慮してみるとよい。これは、高校で教えられるあの普通のユークリッド幾何学の「公理」、基本的仮定、の一つである。が、それは明らかに真理なのではないだろうか？

真理であるというのは、絶対的な特質を帯びた、非常に強い言葉である。強すぎるのである。われわれが実際に知っていることは、このユークリッド幾何学の前提は、多くの通常の物質界の状況において非常に実際的な結果を生み出しているということである。これがその真価である。けれども、平行線が無限大まで延長されると、両者は無限小までますます接近し、ついに無限大において交わりと仮定する幾何学もある。無限に延長されるにつれて、平行線は徐々に分かれていき、ついに無限に遠

くまで離れると仮定する三番目の幾何学もある！ これらの異なった幾何学は数学者たちには非常に役立ち、宇宙航空学において実用的な価値がある。これらの二つの幾何学は「真理」であろうか？ そうである。もしそれらを適切に適用するなら、ユークリッド幾何学とちょうど同様に真理なのである。

これら三つのうちのどれが「本当に」真理なのだろうか？ どの現実の中であなたはそれらの真实性について尋ねているのだろうか？ 心的空間の中で？ 太陽のような巨大な重力源の近くの、湾曲したアインシュタイン的空間の中で？ あなたの裏庭の中で？ いずれにせよ、普通の物質的現実の中では、それを知るために誰が実際に平行線を無限大まで延長することができるだろうか？ 基本的なポインントは、真の論理は一つしかないとわれわれが信じているかぎり、われわれの知的機能は制限され歪められるということである。ある一つの論理、一組の仮定においては誤謬であり、人を誤らせるものが、他のそれにおいては正確かつ有用なものかもしれないのである。

一つの論理体系を実際に知り、それを正しく使うことは、人間のもっとも偉大な才能の一つである。さらに、いつその論理体系が不適切で、また、いつそれを使うべきではないかを知ることが、なおいっそう偉大である。その時は、より適切な論理体系の使用を考慮することができる。これには他の知的論理のみならず、感情的脳および身体／本能的脳の論理、さらには第一章で論じられたさまざまな変性意識状態の論理が含まれる。

さらに、われわれが酔いしれてしまうもろもろの考えは、しばしば、混濁したたわごとだということとを悟ることが重要である。われわれが用いる実際の思考は、自分たちが用いていると信じている論理体系の規則と仮定に関して、しばしば、ずさんで不正確な仕方でも適用され、それがさらに、現実に

対するわれわれのシミュレーション、あるがままについてのわれわれの観念を、なおいつそう現実との接触から遠ざけてしまふのである。合理化が眞の論理に取って代つてしまふこともよくある。

身体／本能的人間、感情的人間、知的人間

どんな人の場合も、三つの脳のうちの一つをかなり丈夫に発達させがちである一方、他の二つは虚弱および／または機能がひどく歪められる。たとえ三つの評価様式全てがある程度は機能するとしても、そのような人の支配的な評価様式によって彼を特徴づけることは有用である。

グルジェフは、身体／本能的機能によって支配されている人を人間第一番、感情的機能に支配されている人を人間第二番、知的機能に支配されている人を人間第三番、と呼んだ。三つの様式全てをうまく機能させ、調和よく相互作用させている進化した人は、人間第四番と呼ばれた。

しかし、この独特の用語法はある種の混乱を招くのではないかと私は思う。なぜなら、数字についてのわれわれの習慣的な理解の仕方では、人間第三番は人間第二番や第一番よりも進化しており、人間第二番は人間第一番よりも進化しているという意味合いがあるからである。実際は、三つのタイプのどれも他のタイプと同じ程度しか進化していないのであり、人間第三番はなんの一般的長所も持っていないのである。この誤解させやすい意味合いを避けるため、身体／本能的人間、感情的人間、知的人間という呼び方を用いることにしよう。人間第四番、バランスのとれた人間は、明らかに他の三つのタイプよりも進化している。

ある脳が他の脳の仕事をする時

三つの脳の発達レベルのアンバランスに加えて、ある一つの脳が、不適切にも、他の脳の仕事をし
てしまふ時、グルジェフが指摘したもう一つの問題が生じる。

たとえば、感情的な問題が知的脳によって評価され、扱われるかもしれない。その問題を感情的に
知覚し、比較し、評価する代りに、それについて知的に考えてしまうのだ。知性は感情的な知識を充
分に把握することはできないので、その問題を適切に評価することはできない。事実、感情について
知的な思考がそれらを誤り伝えるかもしれないが故に、および／または無意識の防衛機制が感情の
知的表象を故意に歪めてしまったが故に、あなたの理解はひどく歪められてしまうかもしれない。

実例を一つ挙げてみよう。新生児の扱いが得意な看護婦である私の妻が、かつて、自分の交替勤務
時間中に死亡したある未熟児について私に話してくれたことがある。その死は彼女を深く悲しませ
た。私はちよつと悲しみを感じ、同情の言葉をかけ、そしてそのことを自分の心から追い出した。一
分後私は、突然頭痛が起きることに気づいた。幼児の死亡の知らせは実際に私に深く影響を与
え、私の感情的脳によって充分に受けとめられ、評価されていたのだが、しかし私の知的脳は、その
日の予定で夢中になっていたのので、感情的脳を適切に働かせる代りに、その知らせを知的に処理した
のである。その結果、その知らせにふさわしい心痛に頭が干渉し、そのため頭痛が起きたのである。

さらに、他の人からの感情的な意思疎通に対する知的な反応は、個人的な拒絶として受け取られる
かもしれない。たとえば、常々過度に知的であった者として、私は、感情的な意思疎通に対する感情
的な反応を持たず、分かち合おうとしない、「表面的」だということ、しばしば他の人々を怒らせ